

家族のかかわりの一考察(8)

— “自己” とのかかわりを通して思春期を考える —

中村洋子(お茶の水女大)

目的：この研究は日常生活における思春期の子どもの自己形成の過程を考える連続研究である。今回は思春期の子が“物”を媒介につくる様々な状況を通して“自己のかかわり”を客観的にとらえることを分析する。また それによる家族とのかかわりの変容を考究する。

方法：思春期の子ども達へのインタビュー・質問紙(T歳 1・2年)により思春期の子が“物”とかかわる動機を探る。その中から1.新たな状況への挑戦 2.自己の思い通りになること 3.架空の世界にひたること 4.人との“やりとり”を体験することの4項目の動機をとらえ分析する。また心理劇(1998~1999年0大 姓と家族をめぐる人間関係を考える会)から思春期の子どもと“物”と家族の関係状況をとらえ分析・考察する。

結果・考察：思春期の子は物を媒介に 1)人と同じ出発点から共に体験し、共感・課題を形成する 2)自己が物を自由に操作する体験を自己が認識すること 3)非現実的な状況と自己の関係をとらえること 4)人との関係体験を自己が認識すること等を獲得し、自己形成の一助としていることが明らかになった。また親は子が物に取り組む様子に、同調・対立・傍観等のかかわりを通して、家族間の新たな関係成立がなされる事が明らかになった。よって思春期の子は“物”を媒介に自己・人(家族)をダイナミックに発展させ 思春期の自己形成につながる事が明らかになった。